

浜

田市内に入ると、「外浦・日本遺産」という大きな道路表示が目についた。

日本遺産というのは六年前に文化庁が打ち出したもので、国連の世界遺産に倣った日本版の文化財による町づくり推進事業だ。奥出雲にいたとき、知人の文化財担当者が「たたら」をテーマに日本遺産登録を目指して奔走していた。会えば互いにかかわねば気の済まぬ間柄だったが、登録が決まって喜んでいられるのを見たときは、さすがに茶化せなかった。

外浦は、「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間」北前船寄港地・船主集落」というテーマで選定されており、北海道から島根までの日本海沿い全県に広がる。岡山とかなりの広域にわたった選定箇所の一つである。西廻り北前船の風待港、また瀬戸内方面への中継地点として栄えた、江戸時代そのままの湾の風景が残る貴重な入り江だ。

ただし、こんなことは、後になって調べて初めて知ったことであり、N君と車から表示を見た時点では何一つ知らず、「何だそれ」と心に浮かべたがせいぜいで、車中の話題にもならなかった。実は、浜田は三十数年前に三年間ほど勤務も生活もした場なのであるが、恥ずかしいかな外浦については一度も耳にも目にもしていない。

今回の旅の目的地心覚院にたどり着いてみれば、何のことはない無知ゆえに無視した外浦のご真ん中だった。浜田藩縁浄土宗の古刹で、ご本尊阿弥陀如来立像は、海中出現の伝承を持つ石見地方唯一の国指定重要文化財なのだ。快慶に連なる慶派鎌倉中期の制作。拝みに訪れる人が少なくないという。

應對してくださったご住職に、四十二年前に受けた恩義を語ると、それは先代住職に間違いはないという。今は高齢の上にお連れ合いをなくされ、体調を崩されているということだった。あの時ばかりを驚かせたS子ちゃんは今も時々寺を訪れるのだという。

「元氣な女性だね。」  
そう言って笑う住職を見て、「あのまんま大きくなったんだ」とぼくも笑いながら顔を見合わせた。住職にねだつて、泊めてもらった観音堂に入らせてもらう。三十三年ごとに公開する秘仏を、

「しょうがないなあ。」  
と苦笑いしながら見せてもらった。大変なイケメンの観音様だった。お世話になりました、と合掌する。  
なぜあの時、この寺に来たのか、記憶をたどる限りは、やっぱり謎のままだ。でも、おそろおそろなのだけれど、阿弥陀さんに導かれたのだ、と思つてみる。そうすると、何だかとてもいい感じに収まるのだ。

專業ババ奮闘記(その2) 81

木幡智恵美

義母の病気 (5)

夫と交代で病院に通う日々、面会の時間じゅう眠つていることもあれば、ベッド横に据えられたポータブルトイレに座つていることもあり、病室に近づくと、「かんごふざーん」の声が届くこともあった。ブザーを押すように言われても、結局壁を叩いたり、声をあげたりするらしい。「背中が痛い」と言われた日のこと。しばらく背中を撫でた後、布団を掛けなおそうとしたら脚が見えた。「腫れが引きましたね」と言うと、「智恵美さんの脚みたくなったわ」と笑顔を見せる。熱いものがこみ上げ、つい目頭を押さえてしまった。土日を除いての放射線治療(二十五日間)が始まり、リハビリでは立ったり座つたり練習をしているとのこと。

術後二週間ほど経つた日、以前ケアマネさんに頼んでいた介護認定のための調査員が病室に来られることになった。夫から、「俺じゃ分からんけん、あんたが対応して」と言われ、立ち会うことになった。約束の午後二時前に病室に入ると、昼食に手を付けた様子はなく、マスク姿で近寄ると、「お茶ください」と言われる。マスクを外すと、「智恵美さんか、どこ行っちゃったかね」ようやく私だと気づいたようだ。お茶を入れ、昼食を促すが、箸をつけようとしなない。持つてきた好物のスイカを出すと、「夢にぼたもち」と、ぺろりと平らげた。

調査員さんが病室に来られたので、傍にいて、私に確認される時は頷いたり、首を振つたり。驚いたのは、「ここはどこですか」の質問に、「施設」という言葉が出たことだった。近所の人の姿が見えなくなったり、デイサービスの人が来られなくなったりした時、「どうも施設に入られたらしいよ」「病院からそのまま施設に行かれたのかなあ」などの話題には出ていた。そんな時、頭の中では自分もいずれはということも考えていたのだろうか。その後、看護師の姿を見て、「あ、病院か」と言い直した。

担当看護師との面談にも立ち会った。昼夜逆転、壁ドンドン、時々、「智恵美さん」と呼ぶこと、食事、着替え、トイレの様子は家とほぼ同じような状況だ。

その後、夫と一緒に医療ソーシャルワーカーさんと話した。放射線治療後は、ショートステイなどの施設へという方向になり、空を探すとのこと。話は進んでいくが、心が追い付かない。

30代フリーター やあ、ジイさん。バイデンは中国に対抗して開いた「民主主義サミット」で「アメリカの民主主義は苦闘のさなかにある」と演説したと報じられている（12月11日朝日新聞朝刊）。

年金生活者 「苦闘」の最大の相手は、大統領選の結果をいまだ認めないトランプを先頭にした国内の一大勢力だろう。というより、そこに露呈された民主主義の限界と言ったほうがいいかもしれない。

民主主義は多数が少数を支配するシステムだ。その根幹をなす多数決原理は、多数の意思を全体の意思とみなし、少数の意思を抑圧する。そうした民主主義の限界は少なくとも富の稀少性が消滅するまでなくなることはない。

民主主義が制度として機能するにはその「限界」を国民が容認することが必須となる。大統領選で「少数者」となったトランプとその支持者らはそれを拒否した。「選挙に不正があった」

など国家間システムに分散させた。消費の過剰化が個人への、産業のソフト化が企業（市場）への、そして資本のグローバル化が国家間システムへの権力の分散を駆動した。人権外交を可能にしたのはこのうち国家間システムへの権力の分散だ。

このシステムには国際機関ばかりでなく、NGOなども含まれ、IOCもそのひとつだ。森喜朗が女性蔑視発言で五輪組織委の会長を辞任したのも、国家間システムとしてのIOCの権力が事実上の解任を言い渡したからだ。問題が日本国内だけにとどまっていたら、あり得ない事態だった。

30代 ソ連と違って人権の抑圧が必ずしも貧困に結びついていない中国に各国は手こずっている。

年金 先進諸国は中国への対抗上いっそう自国の人権の尊重に傾かざるを得なかった。今世紀に入ってジェンダーフリーやマイノリティーの尊重が進展した要因のひとつがそこにあると考えられることができる。

という根拠のない理由からだつたにもかかわらず、大勢の国民がそれを支持した。

中国はそうしたアメリカの民主主義の「不都合な現実」を見透かしているから、自分たちの民主主義がアメリカのそれより優れているとまで言う。

「民主主義サミット」と同時期に中国で共産党と政府が主催して開いた民主主義をめぐる国際フォーラムで、中国側の出席者は「米国式の民主主義はすでに問題解決の能力を失い、空っぽの殻に成りはてた」と語っている（12月10日朝日新聞朝刊）。

30代 中国政府は「中国式民主主義を創造した」とアピールする白書を発表すると報じられている（12月4日産経新聞WEB版）。

年金 「民主主義」には反対できないから無理やり強弁しているのではなく、本気で自国が「民主主義」だと考えていると推察される。政治的自由を制限する一方で、経済的自由は相当程度まで容認しているのが彼らの「社会

前世紀においてソ連が統制経済の超大国としてアメリカと覇を競い合ったことが、冷戦末期に先進諸国を市場原理優先の新自由主義に走らせたのとそれは似ている。歴史は前に進むために、それに反することを必要としていることを示している。

フランス革命は王政を倒したあと、王政に戻る反動を経ながら進化した。歴史は動と反動を繰り返しながらしか進まない、あるいはジグザグにしか進

主義市場経済」だからだ。

その体制のもとで中国国民は、建国当時およびそれからの数十年間にくらべてはるかに広がった経済的自由を享受している。改革開放の名のもとに、世界経済のグローバル化の波に乗って発展した市場経済が国民の稼ぐ自由と消費する自由を広げた。それは政治的な不自由を埋め合わせる役割を果たしており、そのぶん国民に支持されていると推定される。これはソ連にはできなかったことだ。

30代 バイデン米政権は、中国政府によるウイグル族への人権侵害などに抗議して、北京冬季五輪に政府当局者を派遣しない「外交ボイコット」を表明した（朝日新聞デジタル、12月8日）。

年金 昔なら「内政干渉」に当たるとうなこうした「人権外交」が当たり前に行われるようになったのは、経済のグローバル化の結果にほかならない。

資本主義の高度化は国家の権力の一部を個人、企業（市場）、そして国連

まない。というより動と反動、ジグザグを推進力していると言ったほうがいいかもしれない。

フランス革命の過程が時間的な動と反動あるいはジグザグだとすれば、東西冷戦と米中対立は空間的な動と反動あるいはジグザグと言える。このうち東西冷戦のほうは東側の完敗に終わった。統制経済は自由な競争を必須とする産業のソフト化の妨げになったからだ。

中国の人権抑圧は産業のソフト化を妨げることはない。それに続いて進展したデジタル化も妨げていないし、むしろ促進する面さえ有している。政治の独裁を温存したまま経済の統制を解除することに中国は全力をあげたからだ。だから、米中対立が東西冷戦のよう一方の勝利で終わることは今の段階では想定しがたい。ただ、現在の資本主義は従来の資本主義の常識を超える方向へ変容しつつあり、人権抑圧の体制がいつまでもそれに耐えられるという保証もない。

ニュース日記 813  
中村 礼治

## 民主主義の限界